

次の文章を読み、まずこの文章の要点を述べ、次に英語教育のあり方に関連づけてあなたの考えを述べなさい。全体で600字以上800字以内で書きなさい。

認知科学では、未解決の大きな問題がある。記号接地問題という。私たち人間は、知っているそれぞれのことが指す対象を知っている。「知っている」というのは、単に定義ができるということではない。たとえば、「メロン」ということを聞けば、メロン全体の色や模様、匂い、果肉の色や触感、味、舌触りなどさまざまな特徴を思い出すことができる。もちろん、これは「メロン」を写真で見ただけではなく、食べたことがある、である。

しかし、実物を見たことも食べたこともない果物はどうかだろう。「○○」という名前を教えられ、写真を見せられる。すると、その果物の外見はわかり、名前を覚えることができる。「甘酸っぱくておいしい」のような説明が書いてあれば、それも覚えることができる。しかし、○○のビジュアルイメージを「甘酸っぱくておいしい」という記述とともに記憶したら、○○を知ったことになるだろうか？イチゴの味を知っていて、「イチゴは甘酸っぱくておいしい」と思っていたら、○○の味もイチゴの味と考えてしまうかもしれない。

記号接地問題は、もともとは人工知能(AI)の問題として考えられたものであった。「○○」を「甘酸っぱい」「おいしい」という別の記号(ことば)と結びつけたら、AIは○○を「知った」と言えるのだろうか？

この問題を最初に提唱した認知科学者ステイブン・ハルナッドは、この状態を「記号から記号へのメリーゴーランド」と言った。記号を別の記号で表現するだけでは、いつまで経ってもことばの対象についての理解は得られない。ことばの意味を本当に理解するためには、まるごとの対象について身体的な経験を持たなければならない。ロボットならカメラを搭載することができ、カメラから視覚イメージを得ることはできる。しかし私たちが対象について知っているのは、視覚イメージだけではない。触覚も、食べ物なら味覚も、対象のふるまい方や行動パターンも知っている。このような身体に根差した(接地した)経験がないとき、人工知能は○○を「知っている」と言えるのだろうか？

出典 今井むつみ・秋田喜美『言語の本質…ことばはどう生まれ、進化したか』





受験番号